

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 27 日現在

機関番号：14501

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2013

課題番号：23730614

研究課題名(和文) 教示行為を軸とした自閉症教育の開発と評価：教えられるより教えたほうが賢くなる

研究課題名(英文) Development of the educational program in children with ASD; Focused on teaching behavior

研究代表者

赤木 和重 (Akagi, Kazushige)

神戸大学・人間発達環境学研究科・准教授

研究者番号：70402675

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円、(間接経費) 750,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、自閉症スペクトラム障害児が教え手となって他児を教える授業を開発し、その評価を行うことであった。研究の結果、自閉症児が教え手になる授業を複数、開発・実施することが可能となった。(1)ノリツッコミを活動内容とし、2人の自閉症児が教えあう授業、(2)6人の障害児が、創作熟語(村上・赤木、2011)を用いて、相互教示を行う授業を実施できた。このような授業の結果、他児にわかりやすく説明することや、社会的相互作用を維持しようとする行為が見られ、授業の効果が確認された。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to develop and investigate the lesson that children with autism spectrum disorder became the tutor. As a result, the two lessons were developed and practiced. The first lesson is that two children with ASD taught each other through the action, NORI TSUKKOMI. The second lesson is that six children with ASD and other disorders taught each other. Through such lessons, children with ASD tried to explain clearly and maintain the social interaction. It was cleared that these lessons' effectiveness.

研究分野：教育心理学

科研費の分科・細目：発達心理学

キーワード：教示行為 自閉症スペクトラム障害 授業研究

1. 研究開始当初の背景

自閉症スペクトラム障害(以下、自閉症と称する)は、障害の原因や発生過程が明確になっていない。そのため、定説といえる教育方法が確立されておらず、様々な教育方法が開発・実施されている。代表的なものを挙げるだけでも TEACCH プログラム、PECS(絵カード交換式コミュニケーションシステム)、RDI(対人関係発達指導法)、サーツモデルなど数多くのものがある

このような教育プログラムの開発により、行動障害の減少や対人関係の改善などの効果が報告されている。しかし、いずれの教育プログラムにおいても抱えている問題がある。それは、子どもを「教えられる存在」としてとらえている点である。自閉症児は、社会性に困難があり、こだわりがある。知的障害を併発している子どももいる。だからこそ、自閉症児の能力をどのようにつけ、問題行動を改善させるかという点は重要である。その反面、彼らを「教える」ことのできる存在として教育方法を開発する視点は、結果として相対的に希薄になっている。

しかし、自閉症児が「教える」ことのできる存在として教育実践を展開することには、定型発達児を対象とした知見が示してきたように、知的発達、社会性の発達、学習意欲の多様な側面に良好な影響を及ぼすことが予測される。

2. 研究の目的

本研究の目的は、自閉症スペクトラム障害児が教え手となって他児を教える授業を開発・実施し、その評価を行うことであった。

3. 研究の方法

研究 1

対象クラス: 知的障害と自閉症を併せ持つ 2 名(A 児, B 児)が在籍する小学校・特別支援学級。A 児(4 年生, 男児, 発達年齢 5 歳 5 カ月), B 児(2 年生, 女児, 発達年齢は 4 歳 11 カ月)。担任教員は、観察年度の前年から、このクラスを担当していた。また、特別訪問指導員が授業に参加した。観察に先立ち、保護者および学校長に対して書面を通して同意を得た。クラス担任には、普段通りに授業を実施することをお願いした。**観察手続き:** 2011 年 4 月から 7 月にかけて、およそ週 1 回の割合で国語の授業の観察を実施した。計 10 回の観察を行った。ビデオカメラで撮影し、同時にフィールドノートをつけた。ビデオデータおよびフィールドノートから、授業の活動内容が質的に変化する時期に注目して、分析を行った。本報告では、特に、1 回の授業

内で、漢字学習が展開した 3 回目の授業観察について報告する。

研究 2

対象クラス: 6 名の障害児が在籍する小学校・特別支援学級を対象とした。アスペルガー症候群の児童が 2 名(小 6, 小 3, いずれも男児), 自閉症の児童が 2 名(小 6 の男児, 小 4 の女児), ダウン症の児童が 1 名(小 5), 知的障害の児童が 1 名(小 3)在籍していた。担任教員は 2 人であった。**対象とした授業:** 2011 年 11 月 x 日に実施された国語の「創作熟語」という活動が行われた回に注目した。創作熟語とは、子どもが既習した漢字を 2 枚組み合わせ、新しい熟語を創るというものである(村上・赤木, 2011)。本時の授業時間は、51 分 14 秒であった。そのうち、担任が教壇に立った時間は、7 分 17 秒であった。残りの時間は、児童が教壇に立って説明するなどの行為がほとんどを占めた。児童が教壇に立っている間、担任は、教室の横の壁際に位置し、子ども同士の会話を促進する役割をとっていた。**分析手続き:** 後方から観察した。ビデオカメラで撮影し、同時にフィールドノートをつけた。ビデオデータおよびフィールドノートから、目的に合致するエピソードを抽出した。

4. 研究成果

研究 1

3 回目の授業では、漢字やひらがなを用いて、「推理クイズ」という学習を行った。「推理クイズ」とは、図 1 のように、1 人の児童が 4 つの単語を四角の枠内に書き、もう 1 人の児童がその 4 つの単語に関連する単語を推測するというものである。

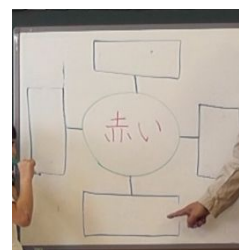


図 1 推理クイズ

この学習活動は、今回の授業においてはじめて導入された。最初に、図 2 のようなやりとりがなされた。

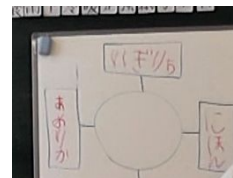


図 3 「可逆」的推理クイズ

次に、B 児、担任、筆者、特別訪問指導員も同様に、推理クイズを出題した。その後、教員は、図 3 のように、「赤い」を書き、A 児、B 児、筆者それぞれに、四角の中に書くように教示を行った。その結果、A 児は「さくらんぼ」と書き、B 児は、「ランドセル」と書いた。

今回の授業では、推理クイズが主活動であ

った。一般的には、推理クイズを反復することが多い。しかし、今回の授業では、推理クイズを主活動としつつも、途中から「可逆的」に発問するという特徴がみられた。繰り返しつつずらしていく活動が、自閉症児に受け入れやすく、かつ、授業を展開していく重要な視点であることが示唆される。

B 児：「いぎりす」「あめりか」「にほん」「ふらんす」と書き、「なんでしょう」と質問/**A 児**：「ちず」と発言。/**B 児**：「ブブー」/**教員**：「おしいなあ」/**B 児**：「もう 1 回いってください」/**教員**：「よう考えたなあ。ほとんど正解」(と云いながら教員が A 児に「世界」と耳打ちする)/**A 児**：「はい」と挙手/**B 児**：「A ちゃん!」/**A 児**：「世界」/**B 児**：「ブブー」/**A 児**：「国」/**B 児**：「正解」/**教員**「A も偉いし、B も偉い」

図 2 教師と児童のやりとり

研究 2

総授業時間のうち、「創作熟語」の活動(約 40 分)に焦点をあてて分析を行ったところ、教師が教壇に立っていた時間は、2%であった。また、6 名全ての児童は、1 人につきおよそ 3 分から 10 分間、教壇に立っていた。

また、質問者役になった児童が、他の子どもを指名した回数は、3 から 5 回であった。教師を指名した児童はいなかった。

以上の結果から、自閉症児を含む障害児間で「指名 被指名」関係が成立していたことがわかる。このことは、社会性が困難な自閉症児どうしにおいても「教えあい」が可能になることを示唆する有力な証拠といえる。

教えあいを可能にする背景には、1) パターンの：発問 解答 評価が一定、2) 具体的：教材を使って解答評価しやすくしている、3) 自由度が高い：解答・評価の自由度が高い、4) 解答を知らなくても発問できる授業構造などが関係していると思われる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 8 件)

赤木和重 (2013) 自閉症教育に異彩を放つ(「自閉症スペクトラム障害の子どもへの発達援助と学級づくり」書評)教育, 805, 120-121. [査読無]

赤木和重 (2013) 自閉症児の社会性を育てる：子どもと子どもの関係を支援する子どもと発育発達, 10, 235-239. [査読無]

赤木和重 (2013) 子どもを見るということ、子どもを表現するということ(伊藤実践論文へのコメント) 人間発達研究

所紀要, 26, 46-51. [査読無]

森脇健夫・山田康彦・根津知佳子・中西康雄・赤木和重・守山紗弥加(2013) 教員養成型 PBL 教育の研究(その 1): 対話型事例シナリオの原理 三重大学教育学部紀要, 64, 325-335. [査読無]

赤木和重 (2013) 心の理論と教示行為：子どもを教えるのではなく子どもに教える 発達, 135, 54-59. [査読無]

Akagi, K. (2012) Development of teaching behavior in typical developing children and children with autism spectrum disorder. CARLS series of advanced study of logic and sensibility, 5, 425-435. [査読無]

赤木和重・村上公也(2012) 「名人芸」実践から見えてくる自閉症発達研究・発達支援の課題と展望 発達・療育研究(京都国際社会福祉センター), 28, 45-60. [査読無]

赤木和重 (2011) 障害領域における発達段階の意義：自閉症スペクトラム障害をめぐって 発達心理学研究, 22, 381-390. [査読有]

[学会発表](計 6 件)

赤木和重 (2014.3.22) インパクト中心主義から考える「発達心理学研究の未来」日本発達心理学会第 25 回大会(於 京都大学)

赤木和重 (2014.3.22) 障害のある子どもの「性格」はどのように立ち上がってくるのか：障害という共通性に規定されたうえでの個性の発露 日本発達心理学会第 25 回大会(於 京都大学)

赤木和重 (2013.8.31) ノリツッコミの発展過程からみる自閉症スペクトラム障害児の発達と支援 日本特殊教育学会第 51 回大会(於 明星大学)

赤木和重 (2013.3.17) 自閉症児どうしにおける相互教示行為を生成する支援構造：複数の自閉症児が在籍する特別支援学級の授業分析を通して 日本発達心理学会第 24 回大会(於 明治学院大学)

赤木和重 (2012.3.10) 特別支援学級における授業の展開プロセス 日本発達心理学会第 23 回大会(於 名古屋国際会議場)

Akagi (2012.9.5) Development of teaching without teaching behavior in children at elementary school BPS: Developmental Section Annual Conference 2012 (於 Strathclyde University)

[図書](計 8 件)

赤木和重・岡村由紀子(2013) (編) 「気になる子」と言わない保育：こんなときどう

する？考え方と手だて ひとなる書房
(pp.101-124)

赤木和重(2012)教える行動の発達と障害
清水由紀・林 創(編)他者とかかわる心
の発達心理学：子どもの社会性はどのよう
に育つか 金子書房(pp.147-164)

赤木和重(2012)障害のある生徒の発達 心
理科学研究会(編)中学・高校教師になる
ための教育心理学 有斐閣(pp.54-63)

赤木和重(2012)障害のある子どもを教える
心理科学研究会(編)中学・高校教師にな
るための教育心理学 有斐閣
(pp.140-147)

赤木和重(2012)ボクはボクである でもけ
っこうテキトウ 松本博雄・常田美穂・川
田 学・赤木和重(共著)0123 発達と保育：
年齢から読み解く子どもの世界 ミネル
ヴァ書房(pp.121-157)

赤木和重(2011)「抵抗」が身体・知性・意
志をわがものにする 山本睦・加藤弘通
(編)ひとつ上をいく卒論・修論を書くた
めの心理学理論ガイドブック ナカニシ
ヤ出版(pp13-24)

赤木和重(2011)自閉症の発見を導いた子ど
もの見方 山本睦・加藤弘通(編)ひとつ
上をいく卒論・修論を書くための心理学理
論ガイドブック ナカニシヤ出版
(pp36-46)

赤木和重(2011)社会性の発達評価 日本小
児科学会・日本小児保健協会・日本小児科
医会・日本小児科連絡協議会ワーキンググ
ループ(編)子育て支援ハンドブック 日
本小児医事出版社(pp.334-339)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年月日：

国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年月日：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

赤木 和重(AKAGI KAZUSHIGE)

神戸大学・大学院人間発達環境学研究科・
准教授

研究者番号：70402675

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし